

論文番号 260

担当

札幌医科大学 医学部 薬理学講座

題名 (原題/訳)

Thiamin treatment and working memory function of alcohol-dependent people: preliminary findings.

チアミン処置とアルコール依存症者の作業記憶機能: 予備的知見

執筆者

Ambrose ML, Bowden SC, Whelan G

掲載誌 (番号又は発行年月日)

Alcohol Clin Exp Res 25(1): 112-116 (2001)

キーワード

チアミン、アルコール依存症、記憶、ウェルニッケ・コルサコフ症候群

要旨

ウェルニッケ・コルサコフ症候群(WKS)はアルコール依存症者で最も頻繁にみられる疾病である。チアミンによる治療はこの病気の急性兆候を迅速に改善すると考えられている。しかし、多くの事実は臨床検査でのWKSの診断確定は死後の診断と比較して難しいことを示唆している。急性WKSの臨床的三主徴なしに、アルコール依存症者でチアミンの治療効果について検討した研究はこれまでにない。我々はアルコールから解毒された107人で、チアミン処置の無作為、二重盲検、複数用量試験を行った。5群の対象者はMini-Mental State Examinationと神経学的徴候の存在の検討がなされた。対象者は連続2日間、異なった用量のチアミンが筋肉内注射され、被験者はチアミン投与後、比較神経精神学的な作業記憶のテスト(delayed alteration task)を試行された。このテストは神経病理学的にWKSを診断することに鋭敏であることが確立されている。全対象群の精神知能状態と神経学的徴候は同等であった。被験者群は年齢、教育、一日アルコール消費量、年間アルコール消費量などの背景に関して等しく分類された。チアミン処置後の検定で、最大量のチアミンを投与された群が最も作業記憶テストで優れていた。結論として、チアミン投与量と作業記憶テストとの治療的相関が示された。これらの結果は、WKSの管理および阻止においてチアミン療法の重要性を示している。詳細な治療相関の確立にはさらに検討が必要であろう。